

平成 30 年度 試行調査 (プレテスト) 設問別分析 地理 B

大学入試センターホームページ (「問題のねらい」等は下記からご覧ください。)

https://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/pre-test_h30_1111.html

試験時間 : 60 分

※設問数は「正しくマークしたときに得点が与えられるまとまり」としてカウントしています。

大問番号 (配点)	分野	設問数 ※	テーマ・出典	分析コメント
第 1 問 (20)	自然環境・ 災害	6	世界の自然環境と災害	<p>具体的な場面設定をしない大問であるため、各小問それぞれに唐突感があるのは否めない。問 1 は、バルカン半島の北部西岸に位置するダルマチア地方の海岸の鳥瞰図を使用した設問である。設問にはこの海岸がどこに位置するか示されていないし、教科書にはいわゆる「ダルマチア式海岸」を、沈水により形成される事例として挙げてはいないが、与えられた図と文章から内的営力と海岸地形に関する成因の理解を基に正答を導かせる設問である。気候に関する問 3 は、文章中の下線部の正誤の組合せ形式の設問であるが、「熱帯収束帯 (赤道低圧帯)」、「寒帯前線」などの用語をあえて使用していないためサ・シの正誤に迷う生徒もいると思われ、また、「アタカマ砂漠は海岸砂漠であると同時に降雨遮断砂漠でもある。東側のアンデス山脈が東からの風を遮り、山脈を越えたときには湿気を失う」(日本地形学連合編『地形の辞典』p.67、2017 年、朝倉書店)といった見方もあり、シの正誤の判定は難しく、正答率は低いと予想される。災害に関する問 6 は、2017 年度センター試験第 1 問でも同じデータを用いた円グラフで、地域を判定させる設問が出題されている。</p> <p>問 1 衛星データ及び GIS で作成した鳥瞰図の読み取りから、海岸地形 (沈水海岸) と地形形成に関わる営力についての理解を問う。問 2 世界のプレート境界の位置を踏まえて、火山及び地震の震源の世界分布相互の位置関係についての理解を問う。問 3 降水の季節変化と地図上の位置から気候の特徴をとらえ、南アメリカ大陸における降水量とその要因についての理解と地図を読み取る力を問う。問 4 「例年に比べて暑い」ことを客観的なデータに基づいて示す方法を特定する地理情報を収集する技能を問う。問 5 日本の河川の模式図から、河川地形と土地利用との関係についての理解を問う。問 6 世界各州における地理的環境と自然災害の各指標との関連性についての理解を問う。</p>
第 2 問 (20)	第 2 次産業	6	資源・エネルギー開発と 工業の発展	<p>冒頭に「資源・エネルギーの開発と工業の発展に関する模式図」を示し、図の中に記号を付して大問全体の流れを作り出している。問 1 は、世界の各地域の石油・天然ガス・石炭の「埋蔵量」と「可採年数」という生徒には見慣れないデータを示した上で、アフリカを問う。問題文に「埋蔵量を年間生産量で除した可採年数」とあることから年間生産量を計算して、正答を導く。見慣れないデータであるが、問題文に用語説明を入れることにより、初見のデータであったとしても取り組み易い設問となっている。問 2 は油田などの写真を 6 枚使用した意欲的な形式であるが、「原油の輸入量を国別でみると、最大の国は日本である」という統計に関する知識を問う問題になっている。問 3 は、具体的な立地移動に関する事例の知識問題とはせず、仮想国を用い資源の使用量の変化、資源の掘削方法と産出量などの過去 100 年間の条件の変化を提示した上で、ウェーバーの工業立地論を背景として製鉄所の立地変化を考えさせる設問である。問 6 は、国別の二酸化炭素排出量の増減について要因や将来について推察させる設問である。</p> <p>問 1 地域別のエネルギー資源の埋蔵量と可採年数の表を読み取り、人口や産業を踏まえて各地域の特徴について問う。問 2 石油と鉄鉱石の利用を事例として、産出・加工・利用・消費の特徴についての理解を問う。問 3 製鉄所の立地に関わる資料を読み取り、工業立地に影響する要因の概念的な理解を問う。問 4 東アジア・東南アジアにおける 1980 年代以降の工業化についての理解を問う。問 5 再生可能エネルギー別に示された国名から、その地域性をとらえそれぞれの再生可能エネルギーの特性と関連付けて問う。問 6 国別の二酸化炭素排出量の増減について傾向をとらえ、要因や将来について推察する力を問う。</p>
第 3 問 (20)	生活文化	6	生活文化の多様性と自然環境	<p>冒頭に「地理の授業で生活文化の多様性について学び、学習の成果を学校の文化祭で他の生徒たちにも伝えるために、展示資料を作成」とあり、場面設定を活かした大問である。問 3 は、気候に関する図 (雨温図) を示して伝統的な衣服と家屋との関連性を問うが、具体的に世界のどの地点なのかを設問中で示していないため、表のまとめられた衣服と家屋の説明が雨温図で示された気候の特徴と一般的に関係しているかどうかという点で、適切とはいえない設問となっており、これは問 6 も同様である。ただし、第 2 回試行調査でみる限り、場面設定において生徒達自身がまとめた資料そのものの学問的な緻密さにはあまり拘らず、それを元に合理的に判断できるかどうかを問う姿勢がみられる。問 5 は、トウモロコシの伝播経路について問う設問で「原産地」を問う単純な形式ではなく、歴史的背景を踏まえ時間軸と空間軸を結びつけた工夫がなされている。</p> <p>問 1 主な宗教の分布図を読み取り、世界の人口分布について知識と関連させ、世界の宗教・宗派別人口について問う。問 2 主な宗教の分布図を読み取り、その伝播について歴史的背景を踏まえて考察する力を問う。問 3 雨温図の特徴を読み取り、その地点の気候を判断した上で、伝統的な衣服と家屋の特徴から気候との関連性を問う。問 4 景観写真から読み取った家屋の特徴を、自然環境と地域の特色とを関連付けて問う。問 5 トウモロコシの伝播経路について、原産地の歴史的背景や他の作物の伝播経路との関連性を問う。問 6 会話文から食文化の画一化について考察させ、日本での事例をとらえた上で、食文化の画一化の根拠となり得る資料を選択する。</p>

大問番号 (配点)	分野	設問数 ※	テーマ・出典	分析コメント
第4問 (20)	オセアニア	8	オセアニア地誌	<p>具体的な場面設定をしない大問であるため、各小問それぞれに唐突感があるのは否めない。問2はサンゴ礁の分布図から堡礁の分布の規則性と傾向性を読み取って関連する事項を問う設問であるが、【図の読み取り】の選択肢B「サンゴ礁分布の周辺域に多く分布する。」と【関連することがら】の選択肢f「現在の間氷期が始まり、海水温が上昇してから、サンゴ礁が形成可能になった」の組合せが堡礁の説明として適切でないのは判断できても、【図の読み取り】の選択肢C「南アメリカ大陸の西岸には分布しない」と【関連することがら】の選択肢e「寒流や湧昇流により海水温が相対的に低い」の組合せは、サンゴ礁全般の説明としては正しいが、堡礁について当てはまるものとして適切であると判断するのは難しい。問5は、ニュージーランドとカナダへ流入する移民に関する文章中の空欄に当てはまる文を、組合せ形式で問う設問であるが、常識的に正解は選べるが、選択肢サに示されたカナダとニュージーランドの移民政策の違いは難しい。</p> <p>問1 オーストラリアの気候分布から各都市の気候区を考察させ、偏西風の影響下にあるオークランドと同じ気候である都市を問う。問2 サンゴ礁の分布図から堡礁の分布の規則性や傾向性を読み取り、関連する事項を問う。問3 景観写真の読み取りと説明文からサモアにおける伝統的な住居と生活について問う。問4 太平洋島嶼国へのODAの供与額の傾向性を読み取り、旧宗主国または旧施政権国との結びつきを問う。問5 ニュージーランドとカナダへの流入人口が多い上位5か国までの送出国から、両国の共通点や相違点をとらえ、移民数への影響を問う。問6 太平洋島嶼国とオーストラリア・ニュージーランドの特徴から、送出国と受入国における人口移動にかかわる要因について問う。</p>
第5問 (20)	地域調査	6	大分市と別府市を中心とした地域調査	<p>高校生のリョウさんとその姉のサツキさんを登場させた場面設定を活かした大問である。問4は大分市の保育所不足の背景に関する設問で、リョウさんとサツキさんが考えた仮説とそれを裏付ける資料の組合せを判断させる形式で、厳密な関係性の判断は検証が必要ではあるものの、「社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等をもとに考察する場面」という、共通テストが目指す場面設定の形式を示す問題の具体例と言える。</p> <p>問1 地理院地図に示された情報を正しく読み取り、経路に沿った風景を問う。問2 大分市の旧版地形図と地理院地図を読み取り、両者の比較から地域の変遷を問う。問3 産業にかかわる二つのグラフから大分市における産業推移を読み取り、産業構造の変化を問う。問4 多様な資料を読み取り、大分市における保育所不足の背景をとらえ、提示させた仮説との関連を問う。問5 別府市への観光客数の推移の特徴を読み取り、その背景となる社会的事象を問う。問6 会話文から大分県における観光の地域的特性について推察させ、観光を通じた地域活性化について問う。</p>